様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２１８５

研究課題名（和文）「尊厳」と「意味」を二本柱とした生命の哲学・倫理学の基盤的研究

研究課題名（英文）A Preliminary Research on the Philosophy and Ethics of Life From the Viewpoints of Dignity and Meaning

研究代表者
森岡　正博（Morioka, Masahiro）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：８０１９２７８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では以下の５つの研究が行われた。（１）「尊厳とは何か」についての概念分析的研究。いまここに存在することの「かけがえのなさ」とは何かを、独在的存在者の概念によって研究した。（２）「生の意味」についての概念分析的研究。反出生主義を批判して「誕生肯定」概念を深化させた。（３）「人生」の概念についての分析的研究。人生の部分の意味と全体の意味について考察した。（４）身体と自然をつなぐ「尊厳」の研究。ハンス・ヨーナスの代謝型生命論と人工知能研究の接点について研究した。（５）「生の意味」研究の生命倫理学への応用。「ペルソナ」の次元と「シェア」の次元の関係について研究し、人間の死の場面に応用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、人生を生きることの意味を中心に考察を進めた。いわゆる「人生の意味」は哲学が古来より探求してきた根本的問いであり、今日の一般市民からも大きな関心を持たれている領域である。それに対して、「誕生肯定」の考え方の可能性を示すことができた点には大きな社会的意義があると考えたい。死にゆく人に対するケアの場面で「ペルソナ」と「シェア」の次元を区別することについても、人々の思索にヒントを与えることができそうである。また、学界で注目を浴びている反出生主義の哲学に対して、その理論の陥穽を指摘し、それに代わる「誕生肯定」の二つの解釈（可能世界解釈と反ー反出生主義解釈）を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, the following five research topics have been discussed.
1) I have analyzed the concept of dignity in terms of the philosophy of solipsism and concluded that the solipsistic being is the bearer of meaning in life.2) I have analyzed the meaning of life from the viewpoint of contemporary analytic philosophy. The anti-natalist philosophy advocated by David Benatar was criticized. 3) I have analyzed the concept of “a life.” The relationship between the meaning of the whole life and the meaning of a part life was discussed. 4) I have discussed the concept of “dignity” and its connection with the body and nature. 5) I have applied an outcome of my meaning of life research to the discussion of bioethics. I defined the concept of “persona” as “voice without sound,” and discussed two dimensions, namely, the dimension of persona and the dimension of sharing in the situation of caring for a human death.

研究分野：哲学　倫理学

キーワード：生命の哲学　誕生肯定　人間の尊厳　人生の意味

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

申請者は、「尊厳」と「意味」を二本柱として、「生命の哲学」および「生命倫理学」に新たな地平を切り開くことを目指して本研究を開始した。その背景としては、申請者が生命倫理学の領域において人間の身体に独自の尊厳を認める考え方を展開してきたことと、近年の分析哲学における「人生の意味」の研究の世界的進展に積極的に関与したいと考えてきたことがある。この二つを柱として、「生命」の概念および現象を哲学的・倫理学的に考察していくことが重要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は、以下の５つの基盤的な問いに対して哲学的考察を加えるものであった。
（１）「尊厳とは何か」についての概念分析的研究・・・カントによる「尊厳」概念は、「価格」と対立されるものであり、いかなる等価物をも許さないものとして構想された。人間に内在されるとされるこの「かけがえのないもの」を現代の視点から再解釈するとどうなるかを研究し、生命の哲学・倫理学に適用することを目的とする。
（２）「生の意味」についての概念分析的研究・・・近年の分析哲学において「人生の意味の哲学」が興隆し始めている。そのフロントランナーであるＴ・メッツは人生の意味における主観主義よりも客観主義のほうが優位にあるとした。本研究では、それを批判し、主観主義のアプローチの可能性を探ることを中心に概念分析を行なう。
（３）「人生」の概念についての分析的研究・・・「人生の意味の哲学」において、「人生」とはそもそも何かということはさほど突っ込んで考察されてこなかった。申請者は「人生」の一回性に尊厳を見るという視点から、この概念を検討することを目指す。
（４）身体と自然をつなぐ「尊厳」の研究・・・申請者は身体に独自の「身体の尊厳」というものがあると主張してきた。この「身体の尊厳」は人間を包み込む「自然」と深い関係を持っていると考えられる。この視点から、「身体」「自然」「尊厳」の関係性について哲学的な考察を深める。
（５）「生の意味」研究の生命倫理学への応用・・・尊厳死や選択的中絶などの生命倫理学の難問に「人生の意味」の視点から切り込んでいく可能性を探る。具体的な素材を検討しながら、生命倫理学における意味の哲学の開拓を行なっていく。

３．研究の方法

研究は文献を用いた哲学的手法によった。研究成果は、適宜、国内・国外の研究会、シンポジウム、学会、講演会などで発表し、参加者や聴衆からの意見・コメントを精査し、自説を再考して改善していくという形を取った。
文献としては、現代生命倫理学、人生の意味の哲学、現代分析的形而上学、人格の哲学などを中心に関連するものを取り扱った。
また、本研究を遂行するなかで成立した「人生の哲学と意味」国際会議にコアメンバーとして参加し、毎年開催される国際集会を運営して参加者たちと意見交換を行ない、この分野の国際的な研究の進展に寄与した。そこでの議論は本研究にフィードバックされた。

４．研究成果

研究は、おおむね当初に設定した５つのテーマに即する形で進行し、成果を出した。研究を遂行するなかで新たな展開が起き、ネットワークが形成された。その結果、当初は想定しなかった研究の広がりが達成できた。その反面、当初の予定を遂行できなかったものもある。それらについて、以下に詳述する。

（１）「尊厳とは何か」についての概念分析的研究
まず「尊厳」について、人間が存在することの「かけがえのなさ」とは何かという視点から研究を行なった。それは、いまここに存在する「私」という存在者の唯一無二性を解明する研究へと進んでいった。その何ものとも比較不可能な唯一無二性にこそ「尊厳」の基礎があると思われたからである。それについて申請者は生きる主体としての「独在的存在者」の概念を提唱してきたが、それをさらに展開して、現在と此処における独在性を付加した「独在今在此在的存在者」の概念を得るに至った。これは二人称的指差しによって確定指示される存在者であり、その原型は古く『ウパニシャッド』において説かれていることが分かった。この存在者の独在性こそが生きる主体の「尊厳」の直接的な在処であり、ここにおいて「人称的世界の哲学」と「人生の意味の哲学」が結ばれる。この研究成果は、論文「独在今在此在的存在者」（２０１７年）、論文「人称的世界はどのような構造をしているのか」（２０１８年）として発表された。
この論点は現代形而上学へと発展していき、運命と必然性をめぐる「現実性」の検討へとつな

がっていった。申請者は入不二基義と著書『運命論を哲学する』（２０１９年）を刊行し、この問題について思索を深めた。そして世界のあり方を、独在的存在者の「起点視点」から開ける「現実世界の開け」と「実在視点」から開ける「存在世界の開け」に区分するという提案を行なった。この二つの世界の重なりが、存在者に唯一無二性を与えているのであり、その上に尊厳を与えているという見通しが得られた。この研究は、現在引き続き進行中である。

（２）「生の意味」についての概念分析的研究

Ｔ・メッツの『Meaning in Life: An Analytic Study』（２０１３年）の議論を詳細に検討し、メッツの３分類「超自然主義」「主観主義」「客観主義」に付け加えて「独在主義」のアプローチが必要であることを申請者は主張した。その理由は、メッツが「主観主義」を批判するときにその批判が（１）で述べた「独在的存在者」の次元にまで及んでいないからである。メッツ自身の主張する「基盤主義的理論」には見るべきものがあると考えた。

この研究は、かねてより申請者が行なってきた「反出生主義 anti-natalism」の批判的研究と接続することとなった。反出生主義とは、生まれてこないほうが良かったと哲学的に主張する考え方であるが、申請者はそれに対して、生まれてきて本当によかったという「誕生肯定」の概念を提唱してきた。現代の反出生主義の哲学をリードするＤ・ベネターの主著『生まれてこない方が良かった』が２０１８年に翻訳されたのをきっかけに日本でも議論が活発となり、２０１９年には雑誌『現代思想』にて「反出生主義」の特集が組まれ、申請者は冒頭対談を戸谷洋志と行なった。その過程において、申請者は「誕生肯定」の概念をさらに分析し、誕生肯定には「可能世界解釈」と「反―反出生主義解釈」の二つがあることを発見した。可能世界解釈とは、もしどこかの可能世界において、この現実世界では解決されていない問題が解決されていたとしても、その可能世界に生まれたかったとはけっして本気で思わないという態度のことであり、反―反出生主義解釈とは、こんな人生に生まれてくるのなら、そもそも生まれてこないほうが良かったという思いは理解できるものの、それは遂行不可能だからそこには固着せず、その思いから解放されて生きていこうとする態度のことである。この定式化は申請者のオリジナルな研究成果である。実はこれに近いことがヴィクトール・フランクルによって述べられていることが先行研究の検討で明らかになった。今後、この方面の比較研究も進めていこうと考えている。この研究成果は論文「A Solipsistic and Affirmation-Based Approach to Meaning in Life」（２０１９年）として刊行された。

また、このテーマの研究を進めるなかで、上記のメッツ教授、北海道大学の蔵田伸雄教授らとこの分野の国際会議を設立しようという話になり、「人生の意味の哲学」国際会議を設立した。これはこの分野における世界で最初の公募型国際学会である。これは本研究の当初には想定されていなかったものである。第１回国際会議を我々は２０１８年に北海道大学で開催し、約４０名の主に国外からの発表者を得た。第２回国際会議は２０１９年に早稲田大学で開催され、約５０名の主に国外からの発表者があった。第３回国際会議は２０２０年に英国バーミンガム大学を拠点とするオンライン会議で開催予定である。この連続国際会議によって、「人生の意味の哲学」に関与する世界の研究者集団が可視化され、相互コミュニケーションが本格的に開始されたのは特筆すべき成果である。（第１回会議は北海道大学の研究費が主に用いられ、第２回会議は本研究の研究費が主に用いられた）。第１回会議の成果論文集が、２０１９年に申請者の編集によって『Philosophy and Meaning in Life Vol.1 : International Perspectives』としてオープンアクセスで刊行された。第２回会議の成果論文集は現在編集中である。この研究項目（２）において、本研究はもっとも展開を遂げた。

（３）「人生」の概念についての分析的研究

申請者は、人生の部分の意味と全体の意味というテーマについて検討を行ない、「全体の中に位置づけられた私の人生の意味」と「私の人生の中に位置づけられた出来事の意味」という二つの層の重なりにおいて人生の意味を見ていくべきだと主張した（論文「人生の意味における部分と全体の予備的考察」２０１９年）。これは「人生の意味の哲学」における「meaning of philosophy」と「meaning in philosophy」の区別に対応するものとも考えられ、今後さらに研究することが必要である。また、「人生」の概念を独自の「懺悔道」の観点から探求した田辺元の『懺悔道としての哲学』に見られる「人生」へのかかわり方に申請者は着目し、申請者がかねてより提唱してきた「生命学」の方法論と比較して両者の同一性と差異を探る発表を国際学会で行なった（“The Method of Life Studies and Tanabe’s Metanoetics” ２０１８年）。これは人生を「生きる」とはどういうことかを考察したものであり、今後論文化する予定である。

（４）身体と自然をつなぐ「尊厳」の研究

この項目については当初計画とは別の方向へと研究が展開していった。まず、身体と自然のつながりの哲学的考察として、ハンス・ヨーナスの代謝型生命論と人工知能研究の接点についての

議論を検討し、人間が身体を内側から生きることと、人間が細胞型生命として生死することの関係性を探った。それによって、身体を通して人間の精神が細胞存在としての生命と連結し、さらに生物進化の歴史と連結しているという見通しが立った。これはヨーナスの生命哲学の２１世紀的展開であると言える。問題は、細胞存在としての人間の身体に尊厳があるかという点であり、これについては今後のさらなる研究が必要である。この研究は論文「人工知能と現代哲学－ハイデガー・ヨーナス・粘菌」（２０１９年）として刊行された。

また、以前より提唱してきた「無痛文明」の概念を人間と大自然の関係に応用したビオトープ批判を、２０１９年にフランスで開催された自然観研究の国際会議にて「The Dialectic of Human Technology and Naturalness」とのタイトルで発表し、フランスと日本の環境学の専門家たちと議論した。これは「無痛文明」概念をはじめて国際会議で紹介したものであり、本研究の副産物的成果である。その反面、「身体の尊厳」について考察を深めるという課題はさほど遂行することができなかった。２０１９年に一橋大学のカント研究会で発表を行なったが、カントの尊厳概念の吟味が終わっておらず、今後の課題として残されることとなった。

（５）「生の意味」研究の生命倫理学への応用

本研究で考察してきた「ペルソナ論」について大きな展開があった。「ペルソナ」を「音波にならない声」として規定し、その「ペルソナ」の次元と並行して、「シェア」の次元というものが存在し得ることを示した。人の死においてまず「シェア」の次元が消滅し、その後に「ペルソナ」の次元が消滅するというプロセスがあり、それは生物学的な人間の死の規定とは一致しない。この研究成果は「The Ontological Status of the Deceased Person Who Continues to Appear in this World」とのタイトルで２０１９年に英国バーミンガム大学の国際会議にて発表した。また論文「そこに人間がいるとはどのようなことか――「生命の哲学」の視点から」（２０１８年）として刊行した。英語の発表は国際的な反響があり、今後、国際的な共同研究に発展する可能性がある。「ペルソナ」についての研究が新しい段階に入ったと考えられる。

以上の研究成果をもって、当初の研究計画で意図されていたことはおおむね達成できたと自己評価している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Masahiro Morioka	４．巻 9(1)
２．論文標題 A Solipsistic and Affirmation-Based Approach to Meaning in Life	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Philosophy of Life	６．最初と最後の頁 82-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森岡正博	４．巻 70
２．論文標題 人工知能と現代哲学：ハイデガー・ヨーナス・粘菌	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本哲学会『哲学』	６．最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Masahiro Morioka and Pierre Bonneels	４．巻 3
２．論文標題 Philosophy, Manga, and Omori Shozo	５．発行年 2018年
３．雑誌名 European Journal of Japanese Philosophy	６．最初と最後の頁 245-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 森岡正博	４．巻 7
２．論文標題 人称的世界はどのような構造をしているのか	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代生命哲学研究	６．最初と最後の頁 107-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森岡正博	4．巻 0
2．論文標題 そこに人間がいるとはどのようなことかー「生命の哲学」の視点から	5．発行年 2018年
3．雑誌名 山脇直司編『教養教育と統合知』東京大学出版会	6．最初と最後の頁 176-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡正博	4．巻 11
2．論文標題 「人生の意味」の哲学	5．発行年 2017年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 180-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masahiro Morioka	4．巻 8
2．論文標題 Philosophy of Life in Contemporary Society	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Review of Life Studies	6．最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masahiro Morioka	4．巻 7(2)
2．論文標題 The Trolley Problem and the Dropping of Atomic Bombs	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of Philosophy of Life	6．最初と最後の頁 316-337
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17613/M62B4Q	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Masahiro Morioka	４．巻 6
２．論文標題 独在今在此在的存在者：生命の哲学の構築に向けて（９）	５．発行年 2017年
３．雑誌名 現代生命哲学研究	６．最初と最後の頁 101-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　6件／うち国際学会　11件）

１．発表者名 森岡正博
２．発表標題 高校国語教科書に現れた哲学エッセイの研究
３．学会等名 第１１回応用哲学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 The Dialectic of Human Technology and Naturalness
３．学会等名 Does Nature Think? (Research Institute for Humanity and Nature)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 The Ontological Status of Deceased Persons in Some Contemporary Japanese Philosophical Texts
３．学会等名 Fifth Annual Conference for European Network of Japanese Philosophy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 The Ontological Status of the Deceased Person Who Continues to Appear in this World
３．学会等名 Life, death and meaning - Eastern and Western perspectives (University of Birmingham)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 Two Kinds of Impossibility in the Comparison of Meaning in Life
３．学会等名 Second International Conference on Philosophy and Meaning in Life（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 Tokyo School after Omori and Hiromatsu
３．学会等名 International Association for Japanese Philosophy "Kyoto School, Tokyo School, and Beyond"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 The Method of Life Studies and Tanabe’s Metanoetics: A Possibility of Post-Religious Spirituality
３．学会等名 Fourth Annual Conference for European Network of Japanese Philosophy（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 A Solipsistic and Affirmative Approach to Meaning in Life
３．学会等名 First International Conference on Philosophy and Meaning in Life（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 The Ontological Status of the Deceased Person That Continues to Appear in This World
３．学会等名 3rd Biennial Conference, International Association for the Philosophy of Death and Dying（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 森岡正博
２．発表標題 人称的世界はどのような構造をしているのか
３．学会等名 応用哲学会第10回年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 森岡正博
２．発表標題 学生にトラウマを与える危険のある素材を大学の授業でどう扱うべきか
３．学会等名 応用哲学会第9回年次大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 Person and Non-existence
３．学会等名 Philosophy of Non-existence, Tokyo Philosophy Project, Special Meeting
４．発表年 2017年

１．発表者名 森岡正博
２．発表標題 人生の意味への独在論的アプローチ
３．学会等名 北海道哲学会・北大哲学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 Philosophy of Life in Contemporary Society
３．学会等名 日中哲学フォーラム（日本哲学会）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 The Dignity of the Body: A Philosophical Implication of the Japanese Organ Transplant Law Before Amendment
３．学会等名 Third Annual Conference for European Network of Japanese Philosophy（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masahiro Morioka
２．発表標題 What is "the Dignity of the Human Body"? : A Japanese Philosopher's Reaction to Brain Death and Organ Transplantation
３．学会等名 Universite Libre de Bruxelles - Waseda's Conference on Bioethics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

１．著者名 入不二　基義、森岡　正博	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 304
３．書名 運命論を哲学する	

１．著者名 Masahiro Morioka (ed.)	４．発行年 2019年
２．出版社 Journal of Philosophy of Life	５．総ページ数 97
３．書名 Philosophy and Meaning in Life Vol.1 : International Perspectives	

１．著者名 Masahiro Morioka (ed.)	４．発行年 2017年
２．出版社 Journal of Philosophy of Life	５．総ページ数 315
３．書名 Nihilism and the Meaning of Life: A Philosophical Dialogue with James Tartaglia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藏田　伸雄 (Kurata Nobuo) (50303714)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	